

ネパールの女性と儀礼

上井輝代



聡明そうなバタンのクマリ

はじめに

ネパールはインドと中国にはさまれた内陸国である。ヒマラヤ山脈を越えると中国チベット自治区である。南はインドのガンジス平野に連なっているから生活も経済もすべてインドと結びついている。ネパールという国が成立するのは4世紀前半であり、リチャビィ王族の一小王国がカトマンズ盆地に入り5世紀半ばに王朝が確立した様である。リチャビィ王族とはガンジス河北岸から東部タライ（平野）地方の小王国である。4世紀前半全インドを統一したグプタ王朝の創始者チャンドラ・グプタ王が発行したコインの一面にリチャビィ族の文字が、他面にはリチャビィ族出身の王妃の肖像が刻まれている。この王族は政変があり9世紀には消滅する^①。

中世期はマハーパートラが世襲的に行政にたずさわり、後にネワールと呼ばれる人びとが国務にたずさわった。15世紀の中頃に約半世紀にわたって在位した王は3人の子どもに国を分割した為、盆地はカトマンズ・バタン・バドガオンの小国にわかれた。カトマンズ盆地に現存する代表的な建築・美術工芸のほとんどがこの時代のものである。この様な文化を支えていたのは交易と農業であった。これらにたずさわっていたのはネワールである。18世紀になってゴルカのプリトビナラヤン・シャハ王がカトマンズ盆地を手中にした。しかしそれも長くは続かず政権の交替劇を繰り返しながら国王親政に踏み切った。マヘンドラ王は1962年に新しいネパール王国憲法を公布した。1972年に跡をついだビレンドラ・ビールとビクラムシャハ現国王はネパール独自の民主主義制度と位置づ

けて政権をとっているが、まだ不安定な国の様にみえる。国を安定させるための手段の一つにクマリがからんでくるのではないかと思われる。

ネパールとはカトマンズ盆地のことで、ここには多様な文化をもった人々が移住してきた。18世紀以前に住み着いた人々がネワールの一員になってしまったということである。カトマンズ盆地に住み着いた人々はここで独特の文化を造り上げた。その伝統は様々な面で今も存続し続けている。インドから伝えられた仏教はヒンドゥ系の王朝であるリチャビィ王朝の成立以来、カトマンズ盆地に生き続け、この王朝はヒンドゥイズムと共存しつつネパールの文化と社会を形成してきた。

1977（S52）年、私は『平凡社カラー新書—ネパールの生神様—』を購入している。そのころからずっと気になっていた国ではあった。最近では日本でもクマリについての記事や、TVの報道もあって、私は日本の古い神祭りなどに参加する少女と思いあわせて、一度その存在を確かめてみたいと思い、1996年の夏休みにインドラ・ジャトラの祭りをみるべく旅だった。

クマリについては本人の意志より先に宗教的なものが優先し、暗いなか閉じこめられているというイメージをもっていたが実際行ってしてみると、そうでもなかった。普通の生活ではなく、限られたなかではあるけれども、子どもらしい暮らしもあって楽しそうな日々を送っていることになんとかほっとした。

ロイヤル・クマリになる条件というのが32もあり、それらの選考をパスして星占いや国王との相性などをクリアし、初めて神としてのクマリになる。クマリについて

は稿をあらためて記すことになるが、クマリの存在は日本におけるヒミコや伊勢の斎宮・沖縄の聞得大君に比定することができる。また日本の祭礼では少女や少年が神になった場合、移動する時には足を地上に置かずに抱かれるか、または用意されたムシロの上を歩く²。クマリもまた、地上に足をつけてはならないという点で同じである。ニュースなどでとりあげられるのはロイヤル・クマリであるが、パタン・バドガオンのほかにも自分たちのカーストのためのクマリをもっている。彼女たちは、ロイヤル・クマリと同じ赤いサリーを着、同じ化粧をして、蛇を型どったネックレスをはじめ装身具なども同じ種類の持ち物で祭りに参加する。これは、地方のクマリがロイヤル・クマリと精神的には同じである事を意味している。いうなれば日本でも祭りに参加する子どもたちが、斎宮等と同じ姿なのと同じ意味を持つと考える。

年中行事の多いネパールの主として女性にかかわる行事を日本の行事と比較しながら論じてみよう。

誕生

子どもが生まれてからの儀式を順に追ってみよう。現世代の日本の親たちが子供が生まれたときにした様に、おしめは巻くだけである。悪いものがはいらないようにベンケグということをする。これは6日までに黒砂糖とギイ（油）とをたべさせる。生まれたらお湯で頭を洗ってもらって、油をつける。生まれて6日目になると祝いをする。今では病院から連れてかえってくる。幸せの日として肉などのおいしいものを母親にもあげる。この日



抱かれている子どもの耳には金のピアスがつけられ、足には銀の輪がはめられている。太くなくてもよいように輪には余裕をもたせている。学校へ行くころまでつけておく

にはじめて塩を食べさせる。この日には生まれた子の面倒をみてくれる人を選ぶ。専門の人がいて朝来て菜種の油を頭の項につける。元気になるという。身体のマッサージもする。女の子は成長が早いので5か月、男の子は6か月にはいると足に銀の輪をはめ耳には金のピアスをする。男の子は6か月になる2日前にご飯をたべさせる。

イム・これはネパール語で蟻のこと・小さいという事である。生まれて6日目の祝いの時に飲ませる。イムを油でこがす。そこへ水をいれると香りが出る。そして着換えさせる。靴・枕などは嫁の実家から持ってくる。

6か月になるとガネツシュを祀る寺院に両親が連れて行く。父親が抱いて、母親が供えものをもって行く。家に連れて帰ると祖父母が順番に人形や熊など動物のぬいぐるみとか着物などをおみやげとして持って来る。

炊いたご飯にミルクをいれてやわらかくしてお椀に入れて金のスプーンで食べさせる。夜は親戚や友達に御馳走をする。男の子も女の子も名前は誰が付けても良い。

生まれた日・時間で星占いをする。星占いできた名前が基礎になる。不幸になった時には宇宙のせいではないか、と考えて、その名前をまた占ってもらう。ご飯を食べさせる日も時間も星占いで決めてもらう。その子のために専門に面倒をみてくれる人にずっと大きくなるまでは世話をしてもらうがこの女性の謝礼はお布施としてあげる。初めてご飯を食べさせる日のことをネパール語ではザンナ・キュウという。ザンナはご飯のことで、キュウは食べさせるということである。

数字の1と3は子どもにとって良くないといわれている。従って1歳のお誕生日の祝いはしない。2歳になると誕生日にガネツシュの神に祈る。

ごま・黒砂糖を白い米の粉をねったものでつつむ。これをヨウマリという。これを神様にあげる。これは子どもが居住している家で作る。

2歳になるとおめでたいといってヨウマリを沢山つけて嫁の実家にも贈る。子どもには布地・靴・帽子などのセットとか男の子にはボールなどが贈られる。

ヨウマリはママ（母方オジ）かママの家へも贈られる。母方オジは男子の成人式の時にも関わりがある。日本の行事でも富山県のちご舞のときには母方オジに肩車をし

てもらって祭礼に参加する²⁹。ヨウマリは3歳の時にはしないが4歳になると4つ贈る。5歳になると家庭でお誕生日を祝う。簡単にする。

シバ神との結婚

ネパールでは女性は3度結婚する。

- 1 シバ神との結婚 ネパール語でイヒという。
- 2 太陽との結婚
- 3 夫になる人との結婚

最初の結婚はシバ神（ベルの実）との結婚であり、ベルの実はシバ神の好きな果物といわれていて、この実がシバまたはビシュヌの象徴である。ベルとはネパール語でシバ・ビシュヌの神様の木である。かむと甘い。地方には多く生えている木で、みかん科に属している。

イヒの日に母親がお寺に連れていく。5歳～9歳くらいの女の子に頭にも飾りをつけて足先は赤く塗って赤いサリーを着せて自分の肩かけのなかに手をいれて（クマリの世話をする人は、祈るときにいつも片方の手を肩からかけた大きなタオルのなかにいれている）連れていく。この行事は1人ではなく何人か集まって一緒にする。寺院が招待することもある。

家で御馳走をする。親戚がお菓子や布地などをもって祝いに来てくれる。日本で言えば氏子入りの行事と同じであろう。

イヒの行事については幸いミムラタロンの祝いと共におこなわれたのでそれを記して見ることにしよう。

ネパール語のミムラタロンというのは77歳7か月と7日の祝いのことである。イヒの女の子は5人いるが、中の1人はミムラタロンの祝いをしてもらおうおばあさんの次男の子である。

祝いの行事がおこなわれる場所は図1に示すように中庭に方形に聖地をつくる。煉瓦造りの家が四方を取り囲み中庭をつくっている。中庭に面している家々には入り口と窓があり、その中庭に入るには2か所の出入り口がある。この中庭ではこれを囲む家屋に住んでいる人達の様々な行事が執り行われる。例えば結婚式も葬式もここでするし、イヒの祝いもここであろう。勿論ミムラタロンの祝いもここで居住している人たちに見守られながら

おこなわれる。この居住区に住む人は伝統はくずれてきているとはいいいながら、同一父系集団に属する人たちである。この聖地は朱の土と牛の糞とを練り混ぜて地面を四角く塗り固める。その四隅に竹をたて竹と竹の間にはガジュマルの葉・菩提樹の葉・葉と葉の間にはお札が下げられている。この聖地をネパール語ではエッゲン・バハという。エッゲンとは護摩・バハとは広場ということである。エッゲン・バハの中に入るには裸足でなければいけないし、帽子もとらなければ皆から非難の目をむけられる。

今日の主役はおばあさんである。名前はサヌマヤ・ドンゴール。ドンゴールというのはジャプー、即ち農民に属するカーストである。

エッゲン・バハの中には僧侶が3人いて、ずっと護摩をたき経（マントラ）をよみ、休むことなく油をついたり、火の様子を見たりしている。五鈷を持ち護摩をたきることにより、真言であるという。家庭を持つ在家僧でネパール語ではグバジュという。袈裟をつけるなどの特別の衣装はないが、襷をかける。1人の僧侶があと2人を連れて来ているとのことで、主役をつとめている1人の僧侶の家族がいろいろ手伝っていた。女性2人はその僧侶の母親と妻であり、5歳くらいの女の子と3人で僧侶の儀礼の道具を作っていた。この女性達は自分の家族以外にチカを儀礼としてつけるカーストであろうから、ここへ参加した人のすべてに祝いの印としてチカをつけた様子であった。

僧侶の正面にはインドラの像が立てられてあって、その横にはミニチュアの籠があり、その上に土器が置かれ、そばに紅白の3段になった笠が立てかけられていた。ネパール語でシナサワがある。これはお祈りをする時にはだいたい木であるという。その根元には水牛の腸が置かれている。赤いままである。

僧侶の前には真ん中に油のはいった燈明皿がおかれ、左側には旗、右側にはお供えが置かれている。

この日は、サヌマヤ・ドンゴールさんの祝いなのであるが、1人の祝いでも、僧侶やいろいろの物いりは一緒なので、5人の子ども達のイヒの祝いもしたのである。子ども達は6歳か7歳くらいである。



前に食物を置いてもらった、盛装した5人のイヒの少女。ミルクと蜂蜜と水が入った容器も見える



黄色の紐で背丈を計っている真言の僧侶。右隅にシナサワがある。木の根元にある赤いのは水牛の腸



参加した父親に抱かれたイヒの少女。しばられた手の中にはベルの実とお金が入っている



石板の上のダルを踏むイヒの少女と、その向こうには赤い染料を塗ったサヌマヤさんの足も見える



ピンク色で描かれた曼陀羅の上に置いた石板とすり棒。これと同じ物が各家庭の儀礼の時に祭られる



シバ・ビシュヌの神の象徴と言われるベルの実（ミカン科）



祝いの前日エッゲン・バハの中に座るサヌマヤさん。前にはともされていない灯明・荘厳としての旗や幡が見える



金製のイヤリングをつけてもらうサヌマヤさん。横は真言の僧侶。結界を示す竹も見える



飾ってあった水壺と三段笠・くじゃくの羽をもつ長男と、孫に背負われて、長男の嫁と鍵・五結をもつサヌマヤさん。手を縛られたイヒの少女と父親



飾られた山車に乗るサヌマヤさん



白い布を頭に巻き付けてもらった長男とその長男。葬列と同じ



白い布の上だけしか山車は通れない

少女達は前日の夜中から何も食べてはいけない。甘い物はよいので夜中にティくらいを飲ませて、そのまま朝を迎える。塩のついたものは絶対食べてはいけない。僧侶の前にも5人の子どもの前にも貝が置いてあって、中には水と牛乳と蜂蜜がはいっている。これと同じものをクマリも持っていた。

翌朝8時には中庭に昨日来ていた人々が集まっていた。昨日の灯明はとりはらわれて、火は小さい容器(貝)に移されていた。火の周りには香料が一ぱいまかれ、兄弟で護摩をたいていた。9時には楽隊が来た。笛・シンバル・太鼓である。9時半ころから30分ばかり音楽を奏でた。

女性2人が中庭に来てピンクで卍を書き、その上に穀物を砕く石板をのせて黒い小さな豆(ダル)をおいて、丸い棒をその上に置く。おばあさんとイヒの少女はさきの女性に足の先に赤い染料(チカ)を塗ってもらって、おばあさんから順番に石板を踏んで、元にもどる。足先の赤い色はクマリの装飾と同じであった。この女性達は生肉やら乾燥したお米などをもらって、ミムラタロンの行列と一緒にこの中庭から出ていってしまった。

僧侶が黄色の紐でそれぞれのイヒの少女の背丈を計って、背丈の長さでその分を折って、所々くくって、皿にのせる。それに葉をつける。花の首飾りの代わりという。水とミルクをかけてもらってバハを一周して元の席にかえる。しばらくおばあさんだけの行事があって、少女は木綿の布をつける。今は写真の様に絹か化繊の服であるが昔は木綿であった。

少女の前に置いてあった皿の中のものを父親が順に渡していきそれを身につける。父親のいない子はおじいさんか兄が代わりをする。頭の真ん中に赤の中に黄色をまぜたチカをつける。これは本当の結婚ではないので黄色をいれる。つぎに手のなかにお金を握らせて紐でくくる。頭に方形の紙を載せる。このあとベルの実を選ぶ行事がある。小さい実を選ぶと若い人と、大きい実を選ぶと8歳とか10歳とか年上の人と結ばれるという。

太陽との結婚儀礼

9歳くらいになると占いで良い日を選んで、9日間一

つの部屋にこもらせる。必ず生理の前でなければならない。初潮がきてしまうとすぐこの行事をしなくてはいけない。この部屋には太陽の光を入れてはいけない。女性だけがお菓子などをもって訪れる。中にいる少女に食べさせるためである。この子達の世話をするのは女性だけ、少女は男性の顔をみてはいけない。勿論父親や兄弟とも会えない。

親戚からはいろいろの豆、大豆・ビーンズ・とうもろこしなどと布地が贈られる。豆とか麦をつぶして手や頭につける。見舞いに来てくれた人はあとで招待しなければならない。

この行事も何人が集まって一諸にするので、子ども達はこの部屋であそんでいる。真っ暗な中に9日間こもって9日目になると朝早く屋上にあがって太陽をみる。赤い服を着て銀のネックレスなどを付け、金でつくった花をつける。クマリのようにお化粧はするが三つ目の眼はかかない。ザルネアコー(鏡という感じのもの、銀でできていて、人との結婚のときにもっていく。)をもってガネッシュの神がまつられているところへ、女の友人達と一緒にいく。

夜には御馳走をする。ママ(母方オジ)もくる。友達を招待するけれど男の子はよばない。少女と太陽の結婚は広義に解するならば、アジアにおいては普遍的なことである。日光感精伝承が多いのは南西諸島である^⑧。これらの感精型神話については三品彰英が分類して論じておられる^⑨。

『魏書』高句麗伝には、「朱蒙の母は河伯の女であり、夫餘王のために室内に幽閉されていた。[ある時、彼女は、室内にさしこんできた]太陽の光に照らされ、身を引いて逃れようとしたが、太陽の光はどんどん彼女を追いかけた、やがて[彼女は]懐胎して一つの卵を生んだ。その大きさは五升ほどもあった。夫餘王はそれを棄てて犬に与えたが、犬は食べなかった。」という話がある^⑩。

日本における太陽神の神話は暗い中にこもっていてそこから出てくるというアマテラスに代表される。沖縄の宮古本島では老婆のつくった宮古島の創世記がある^⑪。

ネパールの少女と太陽との結婚、そして少女が鏡をも

ってガネッシュの所へ行くことと、沖縄の話と、アマテラスの神話なども含めて考えると、すくなくとも洞窟と暗闇、太陽と少女との出会いという同じモチーフがみられる。

また『日本霊異記』「中巻 女人悪鬼に点められて食らはる縁 第三十三 大和の国十市の郡庵知の村の東の方に、大きに富める家ありき。姓は鏡作の造なり。ひとりの女子ありき。名は万の子といふ。いまだ嫁がず、いまだ通はず。面容端正し。高き姓の人よばふに、なほし辞びて年祠を経たり。」この頭注に「鏡作氏は鏡を象徴とする太陽神とそれを祭る巫女の神婚説話を伝承した。あるいは祖神の太陽を招く巫女の宗教儀礼をもっていた」^⑦と記されている。

このようにみえてくるとネパールの少女の太陽との結婚は日本の伝承と同じことと考えていいのではないか。日本の古い時代の儀礼が現在のネパールでおこなわれているのである。

人との結婚については別稿に譲りたい。

77歳7か月7日の祝い

77歳7か月と7日の祝いをミムラタロンという。男性がその年齢に達した時には妻も一諸に祝いをしてもらえ。今日の主役であるサヌマヤさんは未亡人であった。未亡人は赤いサリーは着られないので白地に模様のあるじみなサリーをきている。祝いの前日からずっと僧侶がお経を唱えている。そしてその間にサヌマヤさんの娘さんが平らにして乾燥したお米^⑧やら水などを撒く。3時頃になると筒のなかに油を注ぎいれて火をつける。灯油をいれていたのは長男の長男すなわち直系の孫である。この火は祝いの日の朝に小さい灯明台に移し替えて、ずっと燃やしておく。夜中じゅう燃やしつづける。グティ（同族集団）の人たちが祝いにくる。お米・布地・お金等を持ってくる。また赤い布地も喜ばれる。この祝いがすんだ未亡人は赤いサリーが着られるのである。だから家族の誰かが祝いにきれいな赤いサリーをおくる。

バハ（広場）の端の方ではミンムラットとよばれる山車がつくられていた。造っているのは男性で、その柱に赤い布を巻き付けているのは女性である。山車の座席に

は曼陀羅が描かれ、その上に座る場所一ぱいの大きいざるに粗とチカに使う赤い粉のまぜたものをいれて置き、その上に座布団をおく。いずれこの上にサヌマヤさんがすわるのである。

祝いの日の8時にはほとんどの人が集まり、静かに見物をしている。火はすでに移し替えられ、そのまわりには香料が一ぱい撒かれ、サヌマヤさんの2人の息子が護摩をたいていた。9時まえに楽隊がきて、9時30分ころから半時間ばかり演奏をする。

前述したように卍をかいた上にのせた石板を踏み、足に赤い色を塗る行事がすみ、少女の首に花の飾りがつけられる。僧侶とサヌマヤさんの息子と孫が赤い襷をかけ、鍋にミルクと米を入れて護摩の火で炊く。護摩の火の上では穴のあいた陶器に油を入れてぶら下げ、その油が少しずつ落ちるので、護摩木が適当にもえる。

サヌマヤさんは髪に油をつけてもらって結ってもらう。サヌマヤさんの長女の子ども（孫）はサヌマヤさんの左に並べてあったお供えを一つずつとる。サヌマヤさんはそのまま僧侶にまわしてお布施にする。葬式の時に、じゃがいも・塩・ターメリック・米を供養として僧侶に渡すのと同じことである。これは全部僧侶のものになる。バハの一角に置いてあったベッドも僧侶のものになるとのことであった。これらのことは、いわゆる疑死回生儀礼としての意味を持っていると考えられる。

サヌマヤさんに金製のイヤリングをつける。宝石はいけない。赤い靴をはかせる。首に黄色の紐の花輪をかける。結婚式のときに花婿と花嫁とがお互いに交換してかけあうのと同じことであるという。

バハ内での行列がはじまる。サヌマヤさんは長男に背負われ、長男の嫁に鍵と五銚とをもたせてもらう。長女の長女が水をまいて先導し、長男の子・長男の嫁・長女・長男・サヌマヤさんとイヒの5人が二周りする。その後、ネワール族ではない僧侶・ブラフマンがサヌマヤさんの前にいき、曼陀羅を描き印を結んで二人で話をしている様子をみえた。聞くところによると、過去・未来の人生について話をしているとのことであった。ブラフマンには牛を一頭布施することになっているそうである。ただし今は違うようである。

1 時少し前にジャプーの楽隊がきて演奏が始まる。先のは違う音楽で太鼓が 2 個とすり鐘である。サヌマヤさんの前には曼陀羅がそのままになっていて、そこに牛の絵のあるコインを置く。そのコインは小額なのであるが非常に数が少ない。小さな盥で長男から順番に手を洗い、貝の中に香辛料とミルクがいれてあるのをかける。それをガルダに供えるという。そして長男はサヌマヤさんの足に額をつけて礼をする。幾人かがお金やら布地などをあげる。サヌマヤさんは髪を結ってもらい、今までのじみなサリーを脱いで真っ赤なサリーに着替え、山車に乗る。赤いチカを混ぜた粉の上に座るのである。

新しいバンドがくる。楽隊と合唱団である。いよいよ行列を組んで町内をまわる。

先頭は楽隊と合唱団・親戚の女性 10 人が全員赤いサリーを着て花をまく・山車に乗ったサヌマヤさんが続く・後ろにたくさんの人が続く。これは誰でも引くことができる。綱の前をいくのは長男、この山車は地面には直接つかないように白い布の上だけを通る。だから白い布二枚を交互に敷いていく。楽隊が合計 3 つ・綱を引く人は親戚の人たちや同じグティの人たちでなかにイヒの女の子も混じってとても賑やかである。バハを出て町内を一周して元に帰るのであるが、石畳なので本人はさぞお尻が痛かろうと思うが、得意満面それはそれは嬉しそうであった。途中では多数の人たちが狭い道に人垣をつくって見物していた。中には神になったというので手をあわせて拝む人もいる。あやかりたいと一緒に綱を引く人もいる。勿論行列が通り過ぎるまで車も人も見物しながら待っている。最後尾では次男と僧侶が辻つじでお供養してまわる。道端に亡くなった人のためのロータリーのような場所があって、サヌマヤさんの前に置いてあった食べ物はそこに供えられる。それは閻魔さんのためのものという。

バハへかえって来ると、長男と長男の長男（孫）の頭に白い布がまかされていた。葬礼の時の跡取りと同じ風俗である。沢山の人から巻いてもらうのだが多ければ多いほど幸せであるという。そのあとはなんとなく解散したが、それでもまだサヌマヤさんへの祝いの品を持って人々がやってくる。

ドンゴールの別の居住地区がすぐ近くにあつて、そのバハで祝宴の用意が着々と進んでいる。料理を請け負うグチィがあつて（これもドンゴールなのであるが）お酒からカレー味の御馳走からデザートに至るまで、材料を揃えるところからはじめてすべて整える。ここにも長老がいて采配をふるうのである。

招待客が 6 時半ころからぼつぼつ集まり、バハバハになって座ってしまったら木の葉の皿が配られて祝宴がはじまった。正式な儀式の食事では金属や陶器の食器を使わず、葉の上に盛りつける。食べ終わると葉は捨てられる。ロキシーというお酒がまず女の孫たちによってつがれる。料理人はででこない。カレースープと蒸して押しつぶして乾燥させたご飯とがだされ、たまねぎとじゃがいものカレー味の柔らか煮がでる。この時の席は招かれた家族単位で男女が同席する。宴の半ばにサヌマヤさんが孫に背負われて登場、そこへもまた祝いをもった人がくる。すべてお代わりが出来るが皆さんそこは適当になさる。あとヨーグルト・シュガー・赤い皮の大根・さとうきびと緑色大豆が配られる。これがだされると宴は終わる。すべて手でたべる。手を洗うのに首の長い壺をもった人が回ってきて、水を上からたらす。そして手を洗うと静かに立って帰って行く。酔っぱらいもいないし、騒ぐ人もいない。知り合いと会うと小声でしばらくにごやかに話をして別れていく。900 人のお客と聞いていた。一度目で 500 人はいたろうか。ふと後を振り返るとサリーに身を包んだ女性たちや、盛装した子どもたちが静かにまっていた。先の人たちが帰ってしまうと、一度掃いて同じ場所に莫塵を敷いて同じように祝宴が始まる。とても千人ではきかないのではないか。親戚やグティの人達と同じ席に私たちもご招待を受けたがもう夜も更けたので失礼して帰ってきてしまった。

ティーズとティハール

——女性だけの祭り——

女性だけの祭りはまだある。1996 年では 9 月 16 日にティーズがおこなわれた。この日、居住地近くにある川の元（滝とか水がわき出しているところ。カトマンズではバグマティ川）までいって沐浴をする。全員が赤いサリー

一を着、額に既婚なら赤いチカを、未婚なら黄色のチカをつけている。前日は絶食し、沐浴したあとはシバ神のところへ行って花などをお供えして祈り、家への帰途は歌を歌い踊りながらかえる。沐浴したあとも食事はしない。この行事は夫の健康と長寿を祈るためのものである。もし夫が亡くなったり病気になると、この日にしっかり祈らなかったからだとな女は非難される。帰宅すると家族で御馳走をたべる。バグマティ川はガンジスと同様に聖なる川である。昨日には屍を焼いていたところに今日は大勢の女性たちが赤いサリーをきて、花束をもって沐浴をしているのである。見当もつかないくらいの女性の数である。左手の山から右手の山にかけて、降りてまがって二重に川にそってならんでいる女性たち、これだけの人がどこに住んでいるのかと思うほどの数である。翌日ヌワコットのクマリに会いに行くために朝早くでかけた。途中の村でティーズの帰りの人たちとあった。タンバリンをならし歌を歌って楽しそうな一行であった。また山の中腹を点々と赤いサリーが動いて行くのが印象的であった。



バグマティ川の川べり。ティーズの日には見渡す限り赤いサリーの女性で埋まる

ティハールというのも女性が主役である。姉が閻魔をだまして、弟を死から救ったという伝説があつて、男の兄弟を祝福する日である。姉妹のいない人は叔母の所で御馳走になる。このことは沖縄に姉が弟のために無事を祈るといふ風習があり、もっとさかのぼればヤマトタケルが叔母のヤマトヒメから火打ち袋をもらったのと同じように、近親の女性が男性に対してもつ霊的な保護力の観念があると考えている日本とよく似ている。祝福してもらった男性は、姉妹たちに布地やお菓子や装身具などのおみやげを持参する。大勢の姉妹がいても、時間を決めてそれぞれの嫁ぎ先を訪れ、曼陀羅を描き、御馳走



大晦日のティハールの宴席で、姉から祝福を受ける弟

になり、祝福を受けるのである。1996年では11月9日であったが、この日は鳥の日でもある。鳥は閻魔さんの使いという。翌日は犬の日で閻魔さんの番犬、次の日は牛で、閻魔さんの乗り物という。その次の日はネワール族のお正月である。鳥・犬・牛については言い伝えがあるが稿を改めて記すことにしよう。大晦日には子どもたちが家々やホテルの門口に来て歌を歌ったり、民族舞踊をしてみせて、幾らかのお金をもらおう。地域の仲間であったり、学生のグループである。彼らたちを閻魔さんのお使いという。日本でも子ども達が家々をまわってお金や供物を集める行事がある。祝福をしてくれると理解しているが、日本でも鬼に愛想をして安泰でありたい、と思っているのかもしれない。ネパールの行事と日本のとをあわせて考えてみても良いことかと思う。

むすび

ミムラタロンの行事では、男性が77歳7か月と7日になった時には、妻も一緒に祝われるというので、それでは女性が先に77歳7か月と7日には夫も一緒に祝われるのかときいてみた。通訳はこまって年上の女性との結婚はほとんどないからそんなときはどうなるかしらないという。

ティーズの行事の伝承に夫が亡くなると、妻が沐浴を怠ったり、シバ神を拝まなかったからだとせめられるが、未亡人になると子ども共々日本の村落共同体と同じく、親・兄弟と同一居住地で暮らすことになる。また嫁にいった先で男の兄弟がいると、そこで親とそれぞれの妻たちと子ども達と共に暮らすのである。したがって従兄弟たちはまるで兄弟同様であった。これらのことは、第2

次世界大戦以前の日本も同じことであった。

朝起きると水をくみにいき、朝食の支度をする。ネパールティとクッキーだけ、二食なので夕食は沢山たべる。日本のように季節毎の献立はない。ネパールの日常は60年前の日本を思わせる。嫁はいつも親から昔はそんなに楽ではなかった、といわれながら暮らしていると聞いた。

女性の儀礼があるように男性にも成人式があり、父親の日があり、それぞれに儀礼があって行事は盛りだくさんである。

大晦日は人々がそれぞれ手燭をともして歩く。人が亡くなると配偶者と長男は一年間は白い服を着ているがずっと先祖を祭るといことはない。したがって墓はない。ネパールでは日本と同じように、仏教にはあの世への救済をもとめ、他の神々には現世の救いを期待しているようにみえる。例えば道のそばに歯痛の神様がいて、そこに釘を打つと直してくれるという。仏教と土地の神については日本とよく似た感覚をもつ。個人の家でも大晦日には昔使った石板と石棒(写真参照)やざるの前に曼陀羅を置いて、供物をそなえる。それぞれの儀礼がおこなわれる時には花や供物で多彩できれいである。日本でも見られる風景である。またネパールの行事には、日本の古い伝承と同じものがいくつか読みとれる。誕生に関してもそうであるし、太陽と少女との結婚についても、ネパールで行われている儀礼の中に、鏡が太陽の象徴であり、それを少女が持って行くことで、太陽との交婚を示す事例がある。それらは日本で点在している資料をつないで、類推して、理解できそうな伝承である。

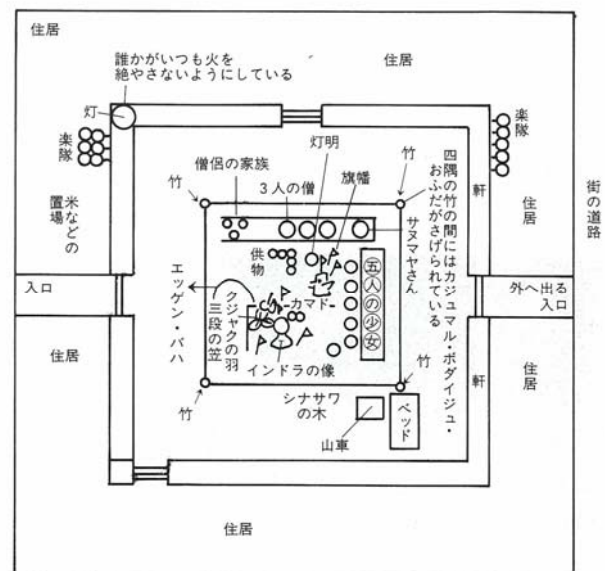
三品彰英の表④にも記されている様に感精型神話の広がり、東は日本から朝鮮半島、西は中国南西部及び南西諸島にも及んでいた。今回ネパールを訪れて、伝承だけではなく、現在もまだ儀礼としておこなわれていることに感動した。

日本霊異記には、万の子が美しい色に染めた絹布をもらって、嫁いだ夫に食べられたあと、結婚のしるしとして贈られた絹布は獣の骨となり、これを載せてきた車は呉朱ゆの木となっていた。カラハジカミ・ゴシュユとは中国産のみかんの一種であると頭注に記されているが、この実もイヒとの結婚に関与するベルの実がシバ神・ビ

シュヌ神を象徴しているのと同型のものであろう。

赤い色について日本でも神に仕える人の色として祭礼に残っている。ネパールにおいて赤い色が何を意味するのかについてはしかとした答えは得られなかったが、ミムロタロンの儀礼は、一度死んで葬式の供物と同じものを整えそれと共にベッドも供養したあと、神になるという。その時に赤いサリーを贈り、赤い靴をはく。日本の還暦にも赤い帽子やチャンチャンコを贈られ祝ってもらうのを思い起こさせる。また祭礼に襷をかけることも同じことかと思われる。

紙面の都合で記せなかったネパールの行事や儀礼は日本のそれと共通したものがあり非常に興味深いものがあった。日本の儀礼と思い合わせていづれ記してみたい。



注

- ①石井溥、『もっと知りたいネパール』弘文堂、1994年。
- ②上井輝代、「朱の記号—東アジアの子祝行事」『芸術 大阪芸術大学紀要』7号、1984年。
- ③『日本民俗文化大系 太陽と月』小学館、1983年。
- ④三品彰英『神話と文化境域』大八洲出版、1948年。
- ⑤井上秀雄他訳注『東アジア民族史1』平凡社、1977年。
- ⑥谷川健一、『埋もれた日本地図』筑摩書房、1973年。
- ⑦小泉道校注、『新潮日本古典集成 日本霊異記』
- ⑧上井久義、「神饌にみる古代の食文化—モチとシトギ—」『四日市市立博物館紀要』第4号、1997年。